

2015年7月12日 礼拝メッセージ

聖書：第二サムエル記13章30～39節

説教：嘆き悲しむダビデ

あらすじ

ダビデの長男であったアムノンは、実の妹のタマルに恋してしまい、そのことからだかやせ細るほど悩んでいました。そこへひとりの悪賢い友人が来て、こうアドバイスします。「あなたは仮病を使って父であるダビデ王をだまし、タマルを自分の家によこすようお願いします。」アムノンはそのとおりにします。そして、タマルを力づくで自分のものとしてしまいました。ところがしばらくしてくと、自分のしたことに後ろめたさを感じるようになります。タマルの顔を見るたびに罪がうずき、不安になります。不安から逃れるためにタマルに怒りをぶつけ、とうとう家から追い出してしまいました。

タマルは灰をかぶり、服を引き裂き、泣きながら兄であるアブシャロムの家に駆け込んでいきます。事の次第を聞かされた兄は怒りを燃やし、いつかアムノンに復讐するのだと心に決めます。それから二年経ったときとうとうチャンスが巡ってきました。羊の毛の刈り取りの祝いをするという口実で、アムノンを含むダビデ王の息子たち全員を招待します。アムノンが酒に酔ったのをみはからって、アブシャロムは部下に命じてアムノンを暗殺しました。それが前回までのあらすじです。

## 1 ヨナダブ

### 1) ダビデを励ます

ダビデのもとに、事件の第一報が入りました。その内容はこうです。30節。「アブシャ

ロムは王の子たちを全部殺しました。残された方はひとりもありません。」これが誤った情報であることは後に判明するのですが、このときはまだわかりません。ダビデは知らせを聞き衝撃を受けます。座っていた椅子から立ち上がり、着物を裂き、地にひれ伏し、悲しみにくれます。

このときダビデのかたわらにいたのが、ダビデの甥にあたるヨナダブでした。彼はこう言います。32節。「王さま。彼らが王の子である若者たちを全部殺したとは思いいなさいませぬように。アムノンだけが死んだのです。それはアブシャロムの命令によるので、アムノンが妹のタマルをはずかしめた日から、胸に持っていたことです。今、王さま。王子たちが全部殺された、という知らせを心に留めないでください。アムノンだけが死んだのです。」

ダビデは国中に情報ネットワークを張り巡らしています。第一報は、このネットワークを通じてもたらされました。ところがアムノンは、この情報の信頼性に疑問をいだき、絶対に信じてはならないと王に対し言うのです。彼独自の別の情報ルートがあつて正確な情報をつかんでいた、ということではありません。彼もまだ事実を知らされていない。それなのにここまで断言するのには、なにか理由があるはずで。

きっかけは、少し前にさかのぼります。ダビデのところへアブシャロムが来て、羊の毛の刈り取りの祝いのことでいろいろ相談していたときのことで。そばでやりとりを聞

いていたヨナダブは、引っかかるものを感じました。アブシャロムが、タマルのことでアムノンを憎んでいることは以前からわかっていました。その憎んでいる男をわざわざ自分のパーティーに呼びたいと言う。この話には裏がある。そう直感しました。ですからヨナダブは、事件の第一報を聞いたとき、意外なことが起きたとは思わない。予想したとおりのことが起きた。けれども一つだけ納得できないことがあったのです。「アブシャロムは王の子たちを全部殺した」との知らせでしたが、どう考えてもアブシャロムには全員を殺す動機がないのです。この情報は間違っていると判断したヨナダブは、ダビデにこう進言します。「王さま。彼らが王の子である若者たちを全部殺したとお思いなさいませぬように。アムノンだけが死んだのです。」

## 2) いのちをかけて

ヨナダブはダビデを励まそうとして一生懸命だった。そのとおりです。けれども、もし王子たちが全員殺されていたのならどうなったでしょう。わざとではなかったかもしれませんが、ヨナダブは嘘をついたことになります。ただでは済みません。場合によってはいのちがかかっている話です。そんなリスクを考えたら何も言わない方がずっとよい。どうせ時間が経てば正確な事実は明らかになるのです。自分のいのちをかけてまですることではない。しかし、ヨナダブはあえて危険な道を選択します。自分のいのちをかけてダビデを励まそうとします。どうしてそこまでするのか。最後にもう一度触れたいと思います。

## 2 ダビデ

### 1) アムノンの死を嘆き悲しんでいた

アムノンはダビデをだましてタマルにひどいことをしました。そのことが原因で、今度はアブシャロムがダビデをだましてアムノンを殺します。このことはやがてイスラエルを揺るがす政治事件に発展していきます。このように問題がますます深刻になっていく中、ダビデは有効な対策を打つとか、積極的に働いたのかどこを見ても、何かをしたとは書いていない。なにかをすどころか、まるで泣き虫ダビデになったかのようです。アムノンとアブシャロムのふたりを除いて、息子たち全員が無事に帰ってきたとき、ダビデは大きな声をあげて泣き出しました。

皆さんはどう思いますか。ある方は言うでしょう。「アブシャロムがアムノンを殺すのはもちろん良いことではない。しかし、アムノンはタマルにひどいことをしたのだから、当然その報いを受けるべきである。ダビデが息子のことを悲しむのは父親なのだからわからないでもないが、ちょっと距離を置いて見るなら、ダビデの態度は少しかたよっているのではないか。」そんな反論です。

いったいどうしてダビデはここまで悲しむのか。その理由を考えたいと思います。

### 2) 親と子

親と子と言う視点から考えます。問題を繰り返す子どものことで親が苦しむということがあります。思いあまって、「こんな子どもを生むでなかつた」と、口で言うことさえある。もちろん、心の底からそんなことを思っているのではない。どんなに愚かな息子でも、自分の子どもには変わりがない。どんなに愚かな息子でもやっぱり愛情は変わらない。それが親と子の関係です。

ダビデは長男であるアムノンが死んだことを悲しみます。親と子の関係ですから、それはわかる。ではアブシャロムのことはどう思ったのか。37節で、「アムノンの死を嘆き悲しんでいた」と日本語訳聖書に書いてあります。ところが、原文では「彼の息子のことを嘆き悲しんだ」とあります。彼の息子とはもちろんアムノンのことですが、実はアブシャロムも含むような不思議な書き方をしています。

そうであるなら、ダビデはアブシャロムのことも嘆き悲しんでいたことになります。事件の犯人はアブシャロムです。けれどもダビデは親としての責任を感じています。「あんなやつとは親と子の縁を切る」と言って突き放すことはできない。ダビデは、親としてアブシャロムのことを正しく指導する義務がありました。アブシャロムが、ダビデのもとへパーティーのことで相談に来たとき、チャンスはあったのです。ところダビデはそのことにはなにも触れず、許可を与えてしまいました。ダビデの責任は免れません。

いや、そもそもどうしてダビデの息子たちがこんな問題を引き起こすのか。さかのぼれば、ダビデが犯した罪に行き着きます。かつて、バテ・シェバとの間で姦淫の罪を犯し、罪を隠すためにウリヤを憎みウリヤを殺したのです。それと同じことをアムノンがやり、アブシャロムがやっている。そういうことなのです。こうなったのはすべて自分の責任ということになります。だから息子たちを責めることなどできません。ただ悲しむしかありません。ここにあるのは無力なダビデの姿です。

### 3 イエス・キリスト

いつも言うようですが、ダビデの姿をとおして主イエス・キリストの姿が浮かび上がります。主はダビデのように愚かな方ではありませんでした。すべての人間を正しく指導できる方です。けれども私たちはまるでアブシャロムのように、心の中で誰かを憎み、実際には手を下さなかったかもしれませんが、心の中で誰かを殺していました。職場の誰か、近所の誰か、クラスの誰か、仲間の誰か、そして家族の誰かを私たちは殺していた。

神はそれをご覧になってどう思われているのでしょうか。「人を憎むような者、心の中で殺す者、そんな者はわたしの子どもではない」、と言って私たちを見捨てたのでしょうか。ダビデは、まるで愚かな父親のようになって自分の子どもたちのために声をあげて泣いた。主も同じです。私たちのことをご覧になり、声をあげて泣くのです。罪を犯すのは私たちの責任であるはずなのに、この方はご自分の責任であると考えてくださり、どんなにひどい問題を起こし、どんなに神に逆らうようなことをしても、この方は私たちの父親であることを止めようとしません。息子たちが罪で苦しみ、次から次へと事件を起こしても、なお自分の息子のことを心配し、声をあげて泣くのです。

そしてもうひとつ、ヨナダブのことからも教えられます。ダビデは自分の罪の結果アムノンを失い、ダビデは地にひれ伏し嘆き悲しみました。そのとき主はヨナダブを通して励まします。全員が死んだのではない。必ずあなたの息子たちは生きている。確かにそのとおり帰って来ました。けれどもアムノンはここにいなかった。アムノンを永遠に帰ってこない。アムノンが死んだのは、さかのぼればダビデの罪のゆえです。ダビデの罪のゆえに、

主の敵が大いに侮っている。主の敵が勝利の雄叫びを上げている状態です。

神はどうされるのですか。手遅れですか。いいえ、神に手遅れはありません。ダビデ一族を救うために主はダビデの子として来られました。主が十字架で死なれたとき、主の敵は完全な勝利を確信したでしょう。しかし、主がよみがえられたとき、死は滅ぼされました。主の敵は完全に滅ぼされました。ダビデが嘆き悲しんだアムノンを、主は取り戻されます。ならば私たちにも同じことが起きるはずではないですか。

目の前では、主の敵が勝ち誇っている現実があるかもしれません。しかし、私たちには希望がある。そのことを覚えたいと思います。